

うたとかたりの対人援助学

第22回「手話民話の語り部・半澤啓子さん」

鵜野 祐介

「ろう文化宣言」そして半澤啓子さんとの出会い

1995年3月、「ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者」という一文が『現代思想』（青土社）に発表された。「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」——この宣言は、「ろう者」＝「耳の聞こえない者」つまり「障がい者」という病理的視点から、「日本手話を日常言語として用いる言語的少数者」という社会的文化的視点への転換を図るものとして、聴者（健聴者）のみならずろう者の間にも大きな反響を呼び、その後27年経った現在も尚、これをめぐって賛否両論が繰り広げられている。

この宣言を、聴者の市田泰弘さんとともに共同で起草（執筆）したろう者の木村晴美さんが、その著『日本手話とろう文化 ろう者はストレンジャー』（生活書院2007）の中で、「衝撃を受けた」手話通訳者として紹介しているのが半澤啓子さんである。

（1991年の第11回世界ろう者会議で）半澤さんの手話を見たとき、私は衝撃を受けた。いちいち頭の中で日本語に変えなくても、ダイレクトに頭にすんなり入るのだ。それまで私が見てきた手話通訳者は、シムコム（日本語対応手話含む）で、そのままではメッセージが頭に入らないので、頭の中でいったん、日本語の文章に組み立てるといった再構築が必要だった。それなのに、半澤さんの通訳だとそういう再構築は不要で、メッセージがそのまま頭に入り、しかも心地よい。疲れない。私は、その分科会に居る間、半澤さんの、…

…よくわかる通訳に目を奪われていた。……現在、半澤さんは、手話民話の語り手としても活躍中である（54-58頁、下線は鵜野による）。

本連載においてこれまで複数回にわたって紹介してきたように、筆者は2016年夏、英国スコットランドで手話民話の語り部の存在を知って以来、日本でもそうした方がいらっしやるのではないかと取材を重ねてきた。大阪や奈良において手話で絵本の読み語りを行っている方々を知り、交流してきたが、いわゆる「素話（すばなし）」での手話民話の語り部さんにはなかなか出会えなかった。そんな中で、木村さんのこの本を通して半澤さんのことを知ったのである。

そしてこの本に、半澤さんが宮城県仙台市在住と書かれていたため、旧知のみやぎ民話の会会員・加藤恵子さんを通じて、せんだいメディアテークや宮城県聴覚障害者情報センター（みみサポみやぎ）に仲介していただき、今年（2022年）4月、半澤さんご自身とコンタクトを取ることができた。

ZOOMインタビュー

本来なら仙台まで出向き、直接お目にかかってお話を伺いたいところだったが、コロナ禍ということもあり、オンラインZOOMでインタビューさせていただくことにした。半澤さんは本連載前号で紹介した「コーダ」（ろうの親のもとで生まれ育った聴者の子ども）であり、音声のみでのインタビューも可能だったが、手話についてのお話を伺う上で、画像付きなのは結果

的にとてもありがたいことだった。

インタビューは5月20日午前中、約1時間半にわたって行われた。録画した映像を再生して確認し、この日お聞きした内容をまとめて以下に記す。

これまでの活動歴

半澤啓子さんは1948年、宮城県大河原町生まれの手話通訳士。1968年より手話通訳活動をはじめ、宮城県手話通訳主任相談員を経て、1992年より仙台医療福祉専門学校勤務。同じ年、東京で開催された第1回全国わたぼうし語り部コンクール(障がい者が民話などを語るもの)で通訳を務めた。

その時の録画を見た宮城県の手話通訳関係者の勧めで、1997年、全国手話通訳問題研究会宮城支部主催の特別手話講座において、民話語り部の穀田千賀子さんとコンビを組み、穀田さんの音声語り、半澤さんの手話語り、手話民話の語りをしたのが最初だという(以下、半澤さんを一人称「私」として記す)。

その後、宮城生協のイベントなど宮城県内を中心に語りの会を不定期に行っていたが、2006年NHK-Eテレ「みんなの手話」で2話の民話(「蛇石(じゃいし)物語」「屁ったれ嫁ゴ」)を語り、また「ろうを生きる、難聴を生きる」でも2話(「山の神さん」「阿子耶松(あこやまつ)」)を語った。さらに2012年から17年までの6年間、Eテレ「みんなの手話」に毎年1回出演したことで、全国各地から手話語りの依頼や問い合わせが入るようになった。

語りの形式とレパートリー

通常は「コラボレーション」と称して、穀田さんとコンビを組んでいるが、手話講習会や講演の中では一人で行うこともある。一人の時には、話の筋をしっかり憶えておかないといけないので、穀田さんと一緒にする方が安心だが、間(ま)を取るタイミングなどマイペースで進められると感じることもある。

現在のレパートリーは28話で、約4分の1が日本の伝承民話、残りは東北の民話を基に穀田さんが再

話・再創造した「創作民話」である。

穀田さんが東北の土地言葉で語るということもあり、外国の物語はレパートリーにない。長年にわたってコンビを組んで活動をしていく中で、お互いに語りの腕前が磨かれていったと感じている。

語りの会の概要

規模も主催者も参加者もさまざまだが、印象に残るものをいくつか紹介する。東日本大震災翌日の2011年3月12日、神戸で行った会(「特定非営利活動法人 神戸ろうあ協会設立90周年記念大会兼第30回耳の日記念大会 特別企画:日本手話と民話のコラボレーション」、神戸市立垂水勤労市民センター)には数百人が集まった。参加者のうち多くの方が1995年の阪神淡路大震災を経験していたこともあってか、会の終了後、前日の震災のことを心配して励ましてくれ、募金活動をして下さったことが忘れられない。

大阪府吹田市では「お笑い手話会」に参加したこともある。手話落語もあるように、しぐさや表情、顔の向きなど、落語と手話には共通点が数多くあることがわかる機会となった。

2000年代には、毎年6月、仙台で開催されていた「とっておきの音楽祭」に出演していた。これは路上で行うもので、野外の開放感があって楽しかった。この音楽祭はそれ以降も続いており、コロナ禍のため2回中止されていたが、今年も行われるようだ。私自身は出演しないが、ろう者たちが毎回出演している人気のブースもある。

宮城県内の小・中学校や青森県の大学でも、依頼を受けて手話の語りをおこなってきた。また町内会の子ども会で開いた時には10名ぐらいのこともあったが、子どもたちやお母さんたちが手話に興味を持って会場に来てくれただけで嬉しかった。

手話語りの特徴

手話の語りならではの表現として、情景を伝えられ

るということがある。私の語りを〈聞いた〉あるろうの方が「すご〜い、情景が浮かぶ」と〈言って〉くれた。小舟で波に揺られている主人公の所に、大蛇になった母親が水の中をやってくる場面が特によかったそうだ。音声では伝わりにくい情景も、手話であれば伝えることができると感じている。

また、登場人物の演技分けを目線や肩の向きで行う「ロールシフト」と呼ばれる動きによって、誰が誰に言っているのか、音声言語では伝えられないことまで伝えることができる。手話は手指で伝える言葉だと思われがちだが、それだけではない。

特に大事なものは目だと思っている。目の位置、目の向き、そして目を閉じたり開いたりすることで特定の意味を伝える。それから、口の形や肩や顎の位置や角度を変え、それらを網羅することでいろいろな意味を伝えている。これが日本手話の独特な表現であり、手指の動きだけで表現するわけではない。

日本手話と日本語対应手話

一方、日本語対应手話では、聞いた言葉（音声日本語）を翻訳するという発想のため、例えば「とてもおいしい」であれば、「とても」と「おいしい」を、それぞれに対応する手話で表現する。けれども日本手話では、目を閉じてからパッと開きつつ、頬を叩くことで一度に表現する。目と手の動きとうなずきを連動させている。

別の例として、「あなたの名前は何？」がある。日本語対应手話であれば、「あなた」「名前」「何？」をそれぞれ手指の形と動きで示すことで完了するが、日本手話では顎の角度を変えることによって、相手との関係性が変わる表現になる。

つまり、顎を引けば目上の人に対して「あなたのお名前は何ですか？」に、普通の角度だと対等の関係の人に対して「あなたの名前は何？」に、顎を上げるようにすると目下の人に向かって「お前の名前は何だ？」となる。またこの時、目線の角度や口の形も微妙に変わってくる。こうしたことも、日本手話であれば表現

できる。

もう一つの例。「(私は) ろうに生まれてよかった」と「ろう(であるあなた)を産んでよかった」も日本語対应手話では手指だけを使うので同じになるが、日本手話では他の部位の動きや向きなど(*これは「非手指動作 [non-manual markers]」と呼ばれる。…筆者注)を総動員して表現するので、違いを正確に伝えることができる。

ろう者の観客と聴者の観客

これまでさまざまな所で手話民話の語りをしてきたが、ろう者の観客がいる場合と、ろう者はおらず手話の講習を受けている聴者だけの場合とでは、語り口が違って来る気がする。意識的にそうしているわけではないが、音声語り部の「日本語」に釣られて、無意識に日本語対应手話になってしまう。日本手話の分らない聴者だけの舞台ではよく日本語に引きずられることがある。反省している。

これがろう者だったら容赦しない。ある語りの会の後で、10数年ぶりに私の語りを〈聞いた〉というろうの方が感想を述べに来られ、「レベルアップしたね」と〈言われて〉嬉しかった。逆に、「今日のはノッてなかったね」と〈言われた〉こともある。そのくらい手厳しい。ちゃんと見て下さっている。

DVD「手話語り 怪談」のこと

2017年9月、「朗読と手話で語る怪談」が舞台公演され、その時の収録映像が翌2018年4月、DVDとしてデフライフ・ジャパンから販売された。

私は「鍋島猫騒動」を語っている。その他、五十嵐由美子さんが「雪女」、佐藤八寿子さんが「耳なし芳一」、田中清さんが「番長皿屋敷」、菊川れんさんが「牡丹灯籠」を手話で語り、穀田さんが音声の朗読をしている。DVDが送られてきたので観たけれど、私自身の語りは、恥ずかしくて見られなかった。他の方は素晴らしい。これこそ日本手話だ。

手話語りの語り手たちとの交流

この「怪談」公演と一緒に参加した田中さんをはじめ、何人かの手話の語り手とおつきあいはあるが、イベントなどで依頼された時に会う程度で、団体や組織に所属して一緒に活動しているわけではない。

2000年代はじめに、数年にわたって「手話語りを楽しむ会」というイベントがDプロの主催により東京で毎年開催され、これを収録したVHSビデオが数本販売された。この会を通じて、小泉文子、南田政浩、砂田アトム、牧山定義、河合祐子、米内山明宏、森田明、川島清、井崎哲也といった方々と共演した。この会がその後どのようなようになったのか、交流が途絶えたので詳しいことは分からないが、皆それぞれに手話普及のために社会活動などで活躍しておられる。

手話民話の語り部として伝えたいこと

はじめは、民話のようなものを〈聞いた〉ことのない、耳の聞こえない人たちに、こういうお話があるよ、ということを知ってもらい、楽しんでもらうということがきっかけだったと思う。皆さんに喜んでもらって、嬉しくて全国各地でやっていくうちに、「手話はろう者にとって欠かせない、大事な言語なんだ」ということを痛切に感じるようになった。

私の両親はろう者で、もし生きていれば100歳になる。両親から手話を自然に覚えた。そして私の娘にも手話を教えようとしたが、小さい頃は覚えようとしなかった。ところが就職して、私や私の母親（娘にとってのおばあちゃん）と同居することになってから、娘はおばあちゃんと手話で会話しようと努めた。最初は私が通訳をしていたが、やがて少しずつ表情が出てきておばあちゃんにもわかる日本手話が使えらるようになってきた。手話通訳者にならないかと勧めたところ、「私は通訳者にはならない。ろう者と一緒に活動したい」と言い、それから数年後、結婚相手として家に連れてきたのはろう者だった。

娘には2人の子ども（私にとっての孫）がおり、今8歳の女の子は耳が聞こえるけれど、4歳の男の子は

聞こえない。息子の耳が聞こえないことがわかると、娘はより一層手話の勉強をして、手話通訳士の資格も取った。今では子どもたちも含めて家族全員、手話で会話をしている。両親から私へ、私から娘へ、娘から孫へと、4代にわたって100年、手話は受け継がれてきたということになる。これを大切にしたい。

.....

そして、半澤さんは次のように締めくくられた。

手話は語るだけではなくて、想像したり、考えたり、夢があったり、今だったらビデオもあるから記録して残すこともできます。こういう素晴らしい言語を失くさないように、大切にしていきたいのです。手話は素晴らしいんだということを皆に理解してもらえようようにしたい。

今は人工内耳ができるようになって、手話よりも口話の方に力が入っています。でも私は、手話の素晴らしさを、両親から受け継いで一番よく知っています。手話はろう者にとって、ありのままの自分で生きていける、唯一の言語だと思っています。だから、一人でも多くの人に、「ああ、ろう者は素晴らしい言語を持っているんだ」ということを知ってもらいたい。「ああ、障がい者」「かわいそうな人」と見るのではなく、「一人の、耳は聞こえないかもしれないけれども、違う言語を持っていらっしゃる人格者」「少数言語者」という感覚で見てもらえるように、これからも働きかけていきたいと思っています。

半澤啓子さん、どうもありがとうございました。

